

爪楊枝とアスピリン

美味しいお料理をお腹一杯戴いて、「マンブク、マンブク」と言いながら、爪楊枝をくわえて一服。まことに、至福の時、です。ところで、この爪楊枝と解熱鎮痛剤として有名なアスピリンが、切っても切れない仲、というより、まさに血縁関係にある、ということをご存知ですか。

実は、アスピリンは、柳の木の樹皮に含まれる成分を化学的に加工して得られたアセチルサリチル酸という物質なのです。そして、一方、楊枝は、文字通り、「楊（やなぎ）」の「枝」と書きます。

柳の樹皮に鎮痛効果や解熱効果があることは、紀元前から知られていたそうです。紀元前5世紀頃活躍した、今日でも医学の父と呼ばれるギリシャの医師ヒポクラテスは、この柳の樹皮を医療に用いていたそうです。インドや中国でも柳の樹皮や葉を痛み止めなどに使用したそうです。中国の古典には、柳の枝を使った楊枝は、歯痛の時噛めば痛みが止まる、と記載されているそうです。

ところで、京都に三十三間堂という有名なお寺がありますが、こんな言い伝えがあるそうです。

後白河法皇、といえ、今、NHKの大河ドラマ「義経」でおなじみ。源頼朝をして「日本一の大天狗」といわしめた方ですが、後白河法皇、頭痛持ちだったそうで、いつも頭痛に悩まされていました。あるとき、夢枕に、「私は薬師如来である。紀州熊野地方の30丈の柳の大木を切って、京都に大伽藍を作り、その棟木にしなさい」というお告げがありました。そこで、熊野川近くの柳の大木を切り出させました。ところが、大木を切ったそのとき、その近くに住む家のお柳という主婦が苦しみだし、夫の平太郎に、こう打ち明けました。「実は、私はあの柳の木の精ですが、以前、一度切られてしまいそうになったところを平太郎さんに助けていただきました。そこで、お礼のために、人となって妻にさせていただき、お仕えしてきました。しかし、今度は法皇様の命令で切られてしまいました。もうお別れです」といって姿を消してしまいました。

さて、人々が、切り出された柳を運んでいたところ、平太郎の家の前で柳の木はびくとも動かなくなってしまう。それを見た平太郎が、お柳さんの忘れ形見、緑丸という子供を木に跨らせて引いたところ、木は動き出し、無事、京に運ばれてゆき、三十三間堂の棟木とされました。以後、後白河法皇の頭痛も直り、法皇は、熊野の柳の大木の跡に薬師堂を建立しました。お堂には、「頭痛山平癒寺」という名を付けました。今でも和歌山県紀和町楊枝というところにお堂があり、楊枝薬師堂と呼ばれ親しまれている、とのこと。ちなみに、京都の三十三間堂も「頭痛山平癒寺」と呼ばれている、ということです。（なお、今の三十三間堂の棟木は柳ではないそうです）。柳の樹皮の効用にかかわる話は仏教の経典や説話の中に多く見られるそうです。千手観音の手の本は柳の木を握っているということですが、本当でしょうか。

1887年、ドイツのバイエルという製薬会社の若手の研究者が、柳の樹皮の抽出エキスから得られるサリシンという物質の分解物、サリチル酸を化学的に加工してアセチルサリチル酸を合成しました。以来、1世紀を超えた今でも汎用される解熱鎮痛剤アスピリンが誕生したのです。